名所物見の旅　其の伍拾参　眠れなかった一夜

黒岳から眺めた表大雪。この一帯はカルデラ台地が広がり、火山特有の雄大な風景を見せている。

文・写真：河辺雄二、CFAY広報課

北海道の山々を一人で登り歩いたことがあった。もう三十年以上も前ことで、青函連絡船で北海道に渡り、まず利尻岳に登頂を果たし、次は大雪山系に廻ろうと旭川から麓の層雲峡に入った。十月だというのに層雲峡の温泉街は雪がちらついていて、真冬の装いを見せている。先行きに不安を感じたが、一夜明ければ雲ひとつない快晴。大雪山を縦走するつもりで意気揚々と黒岳へ登っていった。

その頃の北海道の山は夏山シーズン以外はどこも静かなもので、このときも黒岳頂上まで誰とも出会わなかった。頂上からは見渡す限り山また山。これから縦走する北海岳や白雲岳をはじめ、目の前には凌雲岳、北鎮岳、間宮岳などの錚々たる北の大地の名峰が屏風のように並び、遠くには雄阿寒岳や雌阿寒岳まで望むことができた。ブラキストン線を越えた北海道では、周辺の針葉樹林が本州とは桁違いなスケールで広がっている。地図では判らなかったが、黒岳の頂上に立ってみると、大雪山群は巨大火山だということに気が付いた。北鎮岳から凌雲岳の前には大きな火口も見え、これから行く黒岳石室は巨大なカルデラの中にある。私は神奈川県とほぼ同じ面積を持つ大雪山国立公園の雄大な風景を前にして、ただただ圧倒されて呆然と眺めているだけだった。

頂上で昼食を済ませたときには、晩秋の陽はだいぶ傾きかけていたので、今日は黒岳石室までしか足を延ばせそうにない。明日白雲岳を越えてトムラウシ岳方面に向かおうとプランを立て直し、のんびりと頂上を後にした。

歩き始めて少し行くと、大きな岩の一角に人影がある。近づいて見ると動物写真家のK氏とその仲間のカメラマンや助手ら四人であった。聞けば半年近く黒岳石室を根城にして、動物写真を撮影しているという。K氏が今日はどこまで行くのかと聞くので「黒岳石室に泊まる予定です」と答えると、皆顔を見合わせている。なんだろうと思っていると、K氏が「一応言っておいた方が良いかな」と驚くべきことを話し始めた。その話によると、彼らは先日買出しと休養を兼ねて札幌に繰り出した。数日後に黒岳石室に戻ってみると、冬季用入口が開け放たれて大量の雪が小屋内に積もっている。ひどい登山者がいるものだと雪をかき出して、寝袋や食料などを奥に移そうと運んでいると、暗がりに何か物体がある。ふと見上げると縊れた死体がカチンカチンに凍ってぶら下がっているではないか。K氏は思わず「やってるー」と絶叫し、驚愕した四人は慌てて下山して警察に駆け込んだ。検死の後、仏はすぐに麓に下ろされたが、彼らはもう黒岳石室に滞在する気にはならず、層雲峡ロープウェーの近くにある狭いリフト小屋に拠点を移したということだった。それによって撮影には毎日黒岳まで登らなければならず、不便この上ないと嘆くのであった。

進退窮まるとはこのことで、私はこの話を聞いて少しの間思考停止状態に陥り、どうしたら良いのか分からなくなってしまった。しかしここまで来て下山することなど考えられない。そうかといって今からでは白雲岳石室まで行くのは不可能だ。私は黒岳石室に泊まる覚悟を決め、トボトボと暗い気持ちで小屋へ向かうのだった。

大雪山黒岳で出会った北キツネ。望遠レンズは100ミリしか持っていなかったので、慎重に近づいて撮影した。

ゴロゴロとした岩の上に雪が積もり、寒々とした賽の河原のような台地に、黒岳石室はぽつんと建っていた。私は勇気を出して冬期用入口の扉を開き、シーンと静まりかえった小屋の中を覗いた。入口近くは雪が吹き込んでいたせいか、床はまだ湿っている。問題の奥のほうは薄暗く、ぼうっとしてよく見えない。死体発見からまだ一週間もたっていないので、随分生々しく感じる。もし四～五日早く来ていたら、私が第一発見者になっていたわけで、そう考えるとぞっとした。

北海道第二の高峰・北鎮岳はどっしりとした立派な山容で周囲を睥睨している。

結局のところ二十歳を過ぎたばかりの若かった私は、情けないことに一歩も小屋の中に入ることができなかった。そこで窮余の策として、小屋の風下の雪の吹き溜まりにツェルト（非常用簡易テント）を張ることにした。狭くて窮屈だが、雪洞のように雪に囲われているので凍死することもあるまい。今夜の寝場所が確保されたとたん急に気が軽くなって、周辺を歩き廻ったり、キタキツネを見つけて撮影したりと、大雪の山を楽しむことができた。ツェルトの中でインスタントラーメンに餅を入れただけの簡単な夕食を済ませ、外に出るとニセイカウシュッペ山が夕日で赤く染まっている。私はそれまで名前すら聞いたことのない山であったが、とても立派な山容なので見入ってしまう。日が沈むと月が出て、大雪の山々は幻想的に青白く輝き始めた。そして満天の星空は今までの不安を忘れさせるほどに素晴らしかった。いよいよ明日は大雪山系をトムラウシ山まで縦走する予定なので、英気を養っておこうと七時過ぎには寝袋にもぐりこんだのだった。

黒岳石室の雪溜まりに張ったツェルト。安らかな泊まり場を提供してくれるはずが夜半の猛吹雪で埋まり、寒さと恐怖の苦難の夜となるとは、この時は思いもよらぬことであった。

ところがそこから苦難が始まるのである。夜九時頃から天気が急変して、猛吹雪となり、雪がツェルトに降り積もって身体が圧迫され、とても眠れたものではない。するとなにやら小屋の事件が頭によぎり、何かに伸し掛かられているような恐怖と耐えがたい寒さに襲われ、一晩中ブルブルと震えながらひたすら明るくなるのを待つという状況となった。

東の空が白み始めるとだいぶ吹雪は収まってきたが、強風が吹き荒れて歩くのもままならないほどである。こうなっては縦走どころか、すぐさま下山しなければこちらの命が危ない。呼吸困難に陥るほどのブリザードの中を黒岳に登り返し、這這の体で層雲峡温泉に逃げ帰った。初めての大雪山登山は散々なものとなり、気分を変えようと知床の山へ向かったのであった。

さてこの話には後日談があって、数年後に大雪を訪れ、白雲避難小屋に泊まっていた時、他の登山者のグループが黒岳石室の話をしている。あの時の事件のことなどが話題にのぼっていて、しまいには「出るらしいよ」などと話しているではないか。どうやら尾鰭がついて怪談話にまでなっているようだった。しかしどのような理由があったか知らないが、死に場所を求めて背広姿に革靴であの雪山を登ってきた人の哀れを思うと、とても話に参加する気にはならなかった。合掌。

訪れるたびにいろいろなエピソードを提供してくれる北海道の山々は、一方で本州の山ではとっくの昔に失われた自然がまだまだたくさん残っていて、その魅力は尽きない。荒らされていないお花畑や高山蝶が乱舞する本来の原始の山の姿は、日本ではもう北海道の山でしか見ることができなくなっている。いずれまた、若かったあの日のように何日もかけて、北の大地の山々をゆっくり旅したいなぁと思う今日この頃である。